

都市デザイン研究
～事例集 vol.1～



モビリティによる生活文化圏の再生

これからの都市デザイン

近頃、「買い物難民」という言葉が新聞、テレビで聞かれるようになった。本格的な人口減少社会、高齢化社会の到来により、普段の生活に必要なものすら自らの手では購入できない人達が増加している。

こうした社会的状況を背景として、都市計画の分野では、コンパクト・シティに代表されるように、居住圏を改めて限定し、交通をはじめとする社会インフラの効率を高める研究や提案が増えている。これは低炭素社会にふさわしい都市の構築を試みている取り組みである。そうした取り組みは重要である一方で、人々の生活に非常に大きな影響を与えるために十分に慎重である必要がある。

私達の提案は、もう一つの選択肢を与えることを目的としている。今ある都市構造を活かしながら、モビリティが機能運びサービスを提供することで、人々の都市の生活を支えていくシステムを提案する。すなわち、これからの社会に必要とされるモビリティによるユニバーサル・サービスに、真正面から取り組むものである。

低炭素社会、少子高齢化社会という大きな枠組みを考えるにあたり、日々の生活サービスの充実やコミュニティの形成につながるようなものを提案したい。特に少子高齢化社会の到来を重く受け止めており、コンパクト・シティをはじめとして広く議論されている、「歩いて暮らせる」という基本的テーマを捉えたものである。

動く機能

①機能固定の限界

コンパクト・シティを始めとする限定された居住圏における社会インフラの効率化は、「周辺」の人口を減らし、「中心」により密集させるというものである。一方、本提案では「周辺」において、「周辺」の持つ良さを活かしながら、豊かな生活を継続させる可能性を示したい。そのためにはまず、「周辺」に日々の生活を支える機能が必要である。

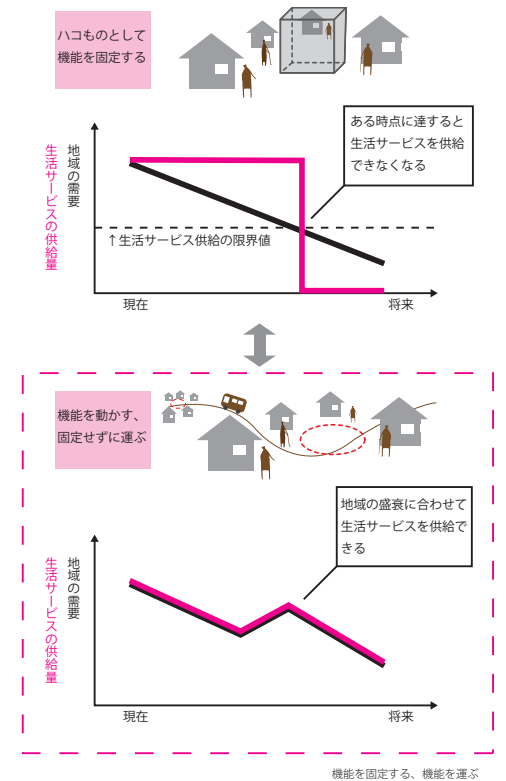
「周辺」に必要な機能をどう配置するのか。一般的な方法としては、各地区の中心的な場所に機能を配置する、つまり、ハコを用意しそこに必要な機能を入れる。それは役所の機能の場合も、医療の機能の場合も、図書館のような文化的な機能の場合もある。地区の中である程度人が集まれる、アクセスの比較的良好な場所に建物を建設し、人々がそこを訪れ利用する。これが、「周辺」に機能を配置する際に考えられる一番目の回答であるだろうし、日本全国多くの地域でとられる対応であろう。

しかし、私たちはその対応に限界を感じている。ハコものとして機能を固定する。それは、地域の暮らしを支える生活サービスの供給に、限界値、つまりサービス供給の終焉を自ら設定しているのではないだろうか。機能を固定する場合、ある程度の需要が常に存在することが前提で、その上で効率よくサービスを提供することを狙っている。しかし、需要が

ある程度までなくなってしまうと、その効率性は崩れる。施設の維持が困難になり、施設が閉鎖する可能性がある。現に、日本の地方都市では、病院等の施設が次々と閉鎖している状況がある。これからの人口減少、少子高齢化社会を考えると、その危険性は非常に高いと考えられる。特に高齢者が増加すると、地区内での移動も簡単ではなく、施設へのアクセスすら重要な課題になってしまう。

②機能を動かす

そこで私たちは、機能を固定するのではなく、機能を動かす、運ぶことを提案する。車で機能運び、様々な地区を訪れ、その場所でサービスを提供する。医療機能を持った車がやって来る。役所の機能を持った車がやって来る。そういった車がネットワークを組んで、地域全体の生活サービスを支えるというものである。ただし、機能運び車と、そのネットワーク、システムをデザインし、より幅のある生活サービスの提供、地区内での魅力ある空間の創出を実現するものである。



③動く機能の可能性

機能が動くということ。それは大きな可能性を持っている。1つ目は、車を用いることで、人々の家の近くまで行くことができる。高齢者でも歩いていける場所で、サービスが供給される。2つ目は、訪れる頻度を変えられるという点である。地区のニーズによって、訪れる回数、やって来る時間、滞在する時間帯をフレキシブルに変更できる。3つ目は、訪れる場所を変えられることである。訪れる場所を増やしたり、減

事例集

モビリティを用いた地域圏再生

ー 全国での取り組み

1. 鳥取県日野郡江府町
2. 山形県西置賜郡小国町
3. 富山県富山市八尾町
4. 千葉県香取市山田区
5. 愛知県新城市
6. 熊本県熊本市健軍町

私たちは、まちに入り込み、住民の皆さんと協力しながら、人々が暮らす、都市という空間を豊かにしていく方法を、日々模索しています。

現在、モビリティを使って機能を運び、地域の生活を豊かにするシステムを提案しています。
住民の皆さんと共に、人と人、地域と地域を結ぶ空間を育んでいきたいです。

balloon
urban design partners -since 2009-

URL : <http://www.tanacar.co.jp/>
twitter : ball66n
mail : balloon@tanacar.co.jp



らしたり、変化する社会の中で柔軟に対応ができる。機能が必要でなくなったところ、機能が新たに必要となったところ、その地区の状況に合わせて、生活サービスを供給できる。4つ目は、動く機能同士の組み合わせができるという点である。車が複数台存在する場合、違った機能同士がある場所で同時にサービスを提供できる。その組み合わせによって、普段とは違った空間を創出できる。日や時間、場所、によって組み合わせを変えることが可能であり、多様なシーンが展開される。自分の住んでいるまちの一角に、魅力的な都市空間が創出される。

④社会の変化するニーズに対応する

このように、動く機能は、様々な課題を抱え、日々変化するそれぞれの地域に対して、柔軟性のある生活サービスを提供することが可能である。変化し続ける社会の、各地域のニーズにフレキシブルに対応できるという点で、機能を動かすことの意味は大きい。

たなカー&ぶらっと

機能を動かし、地域での生活を支えるシステムを構築するために、「たなカー」というモバイル施設と、「ぶらっと」という小さな公共空間を提案する。

① たなカー

「たなカー」という名前は、部屋の中の”棚”のように、すぐに手の届くところにある施設、という意味からきている。また、「たなカー」は機能をのせた”棚”であり、機能を商品棚の上の商品のように運んでくる。「たなカー」のベースとなるのは既存の移動販売車である。そこにいくつかの改造を加えていき、既存の移動販売車よりも停まった場所と一体化し滞留空間を創出するようなものを目指している。また、将来的には電気自動車をを用いた低炭素なシステムを想定している。「たなカー」は訪れた場所で一定時間過す。商品を運ぶ「たなカー」であれば店舗に、医師・医療機器を運ぶ「たなカー」であれば診療所に、市の職員・窓口を運ぶ「たなカー」であれば役所の出張所になる。家の近くにその時間だけ、施設が登場するのである。

「たなカー」により、機能が近所にやってくる。それと同時に、「中心」が近付く。すなわち、「中心」に人を運ぶモビリティから、「中心」を人へと運ぶモビリティへの転換である。これが「たなカー」の持つ可能性の1つである。

さらに、「たなカー」の持つ可能性で、私たちが期待していることは、普段の何気ないまちかどに、多様なシーンを創出することである。

「たなカー」が来ることで、ある時は家の前がレストランに、またある時は図書館に、またある時はこどもの遊び場になる。さらに、将来このシステムが普及していくと、2つの機能が同時に来ることもある。そこは、病院の待合室であり、ご近所さんと世間話をするカフェでもある。違う日には、流行の服が買えるショップであり、おじいちゃんたちのリハビリセンターでもある。

そこには世代を超えた交流があり、家の外のちょっとした安らぎの場であり、自分の居場所になる。「たなカー」は機能

を運んでくるだけでなく、豊かな空間をも運んでくるのである。これから到来する高齢化社会において、家の近くに人々の交流する空間があることは非常に重要である。人と触れ合う機会を高齢者から遠ざけないこと。子どもも含め、地域全体で見守っていくこと。コミュニティの面からみても、「たなカー」は貢献することができる。

「たなカー」のメリットの一つに、停まる場所を増やしたり、減らしたり、簡単に変更できるという面がある。「たなカー」の停まる場所は簡単な操作で生み出すことができる。空いている駐車場に停まったり、空地を利用したりできる。それによって、柔軟に社会に対応できるのである。

②ぶらっと

「たなカー」が停まる、プラットフォームのような場所を作ることで、まちにとって良い影響をもたらすことができる。それが「ぶらっと」という小さな公共施設である。「たなカー」が停まる場所。”あそこには、明日、「たなカー」がやってくる”、そのイメージが住民の頭に描かれた時、そこはまわりとは少し違った、ちょっとだけまちなかで際立つ空間となる。既存の建物を改修したり、屋根だけ架けたりと、ほんの少しの操作でその空間を作ることができる。自然と住民が集まってくる、自然と笑顔がこぼれる場所が、まちなかに生まれる可能性がある。

どこにでも停まれるということ、停まる空間を創出すること、両方をバランスよく行うことで、「たなカー」の持つ可能性はさらに広がる。

移動販売や小さな公共空間は今も多く存在する。しかし、それに名前をつけネットワークを組みシステムとして構築することで、一つ一つの足し算ではなくかけ算となり、人々の生活を支えるまでの大きな機能となると考えている。それが「たなカー」「ぶらっと」なのである。



「たなカー」が来た「ぶらっと」のイメージ

一事例集作成にあたってー

事例から学ぶ

私たちの提案「たなカー&ぶらっと」の実現に向けて活動していく中で、参考となる取り組みをいくつか見学してきた。今回は2010年度に見学した事例を、事例集という形でまとめることにした。1つ1つの取り組みから、そのまちを良くしていきたいという強い想い、そしてそのための工夫を学ぶことが出来た。それと同時に、現在直面している困難、これから取り組まなくてはいけない課題、といったものも目にする事が出来た。それらを広い視野で捉え、比較、考察することで、見えてくるものがあるのではないだろうか。ある事例の課題解決のヒントを他の事例が示してくれる場合もある。ある事例の直面する困難から得られる知見も多いだろう。それらをお互いが共有していくことで、新たなステップに進める可能性は大きくなる、と期待している。

もちろん、事例集作成の最大の目的は、私たちballoonが「たなカー&ぶらっと」の実現に必要な視点、論点を整理し、今後の議論、活動に活かしていくためであるのだが、今回取り上げた事例は、全国的にもユニークな取り組みで、どこでも課題となっている地域再生のヒントとなるものであり、広く知ってもらうことの意義は大きいと考えている。

買い物難民への取り組み

今回取り上げた6つの事例のうち、4つは買い物難民の解消に貢献している移動販売である。「たなカー」は移動販売車をベースに、コミュニティの創出のための工夫、デザインを施していくものであり、当然、移動販売の事例は大きな参考になる。移動販売の事例は日本全国いくつも存在するが、その中でも、現在社会的に問題視されるようになった買い物難民の解消に向けて動いている事例を見学した。「たなカー」の役割としては、生活サービスを地域内で提供すること、がまず重要である。これは今の買い物難民の問題と大きく重なる。買い物難民支援に関しては、2010年度から経済産業省が本格的に動き出しており、これから先進的な事例を共有していくこと、それをもとに議論を深め、行動に移していくことが必要とされている。今回の事例集が、買い物難民支援に動いている方々の参考になれば幸いであるし、それに貢献できるような活動をballoonは展開していきたいと考えている。

取り上げた事例の1つ目は、鳥取県日野郡江府町の移動販売である。この事例の特徴は、専用の移動販売車によるきめ細かいサービスを提供している点にある。移動販売であるが、店舗としての空間が創出されており、また、訪れる頻度も多いため、日常の買い物の場として機能している。2つ目は、山形県西置賜郡小国町の移動販売である。こちらもきめ細かいサービスを提供しているのだが、地元の企業が独自に運営している点が特徴である。3つ目が富山県富山市八尾町の取り組みであり、これは富山市の試行事業として、行政が積極的に取り組んでいる点が、他の事例にはない点である。4つ目は、千葉県香取市山田区の取り組みである。これは日頃か

らballoonがケーススタディとして参加させてもらっている取り組みで、住民が独自に運営している点がユニークである。

モビリティを用いたイベント

移動販売以外の事例としては、愛知県新城市の軽トラ市を取り上げた。近年、注目を集めるようになってきた軽トラ市の先進事例である。地元の商品を軽トラで手軽に販売できる市場は、地域再生の起爆剤となり得る。事例集のタイトルにもあるように、まさにモビリティを用いて地域再生を図ろうとするものである。「たなカー」のデザインの大きなヒントとなると考え、見学させていただいた。また、イベントとしての非日常の取り組みは、「たなカー」の持つべき日常性・非日常性を考える材料となった。全国各地で軽トラ市への関心は高まってきており、重要な事例である。

公共空間のあり方

熊本県熊本市健軍町の医商連携の取り組みは、モビリティを用いた事例ではないが、私たちが目指す「ぶらっと」に近い空間であり、取り上げることにした。日常の中で、人々が自然と集まる空間を創出するという点で、大変参考になる事例である。また、全国的に大きな課題である商店街活性化のヒントになる事例である。

事例への視点

以上の6つの事例を見学したわけだが、事例の紹介の際は以下の点に注意した。

まず、どのような地域であるのか、ということである。その地域の人口、地理、歴史、交通、産業など、現状を整理した。その取り組みがどのような効果を持ち、課題を持っているかを明確にするために、地域の現状を把握することは非常に重要である。また、他事例との比較の際に、地域の条件を比較しながら考察することが必要となってくる。

次に、事業者がどのような問題意識を持ち、どのような意図で取り組んでいるのか、である。その取り組みの始まった経緯、そして今までの変遷を、事業者へのヒアリングを基に整理した。

さらに、どのように運営を行っているのか、どのようなサービスを提供しているのか、ということも重要である。「たなカー&ぶらっと」も持続させるためには、ビジネスとして成り立たなければいけない。それぞれの取り組みを維持・発展させていくための運営上の工夫や課題を、ヒアリングを基に整理している。

事例を選定する段階で、これらの点でユニークである事例に着目している。

そのように選んだ先進事例から、多くのことを学びたい。そのような想いで事例集を作成した。